



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜報. 天界 1928, 8(83): 95-99

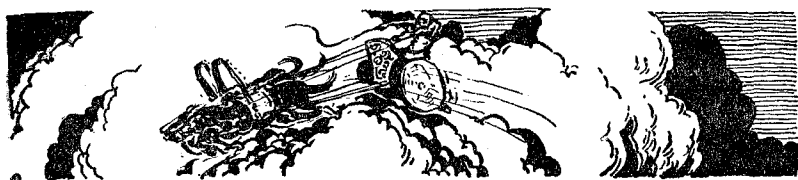
ISSUE DATE:

1928-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161230>

RIGHT:



## 雑 報

### 新変光星「かちき座 $\beta$ 星」

普通には5等星と記されてゐる「かちき座 $\beta$ 星」が変光星 H. V. 4010 であるとして、近頃ハーブード回報第316號に紹介された。報告者は H. Shapley 教授と Miss M. L. Walton とである。

此の星のスペクトルが變であることを認めたのは Palmer, R. E. Wilson, Lunt, Miss Applegate 等であるが、光度の變化は、比較星が少ないため今まで殆んど知られてゐなかつた、近頃南天の畫架座新星(1925年出現)撮影のためハーブードの南天出張所で得られた寫眞板により、漸く此の $\beta$ 星の寫眞光度の變化が測られたのであつて、其の結果、

變光週期	$H$ 9, 841 696
變光範圍	{ 4.25 より 5.65級(寫眞的) 約1等級(眼視的)}
減光期間(m—M)	6.85日
スペクトル變化	普通のセフアイ式, $F_0$ より $F_9$ .

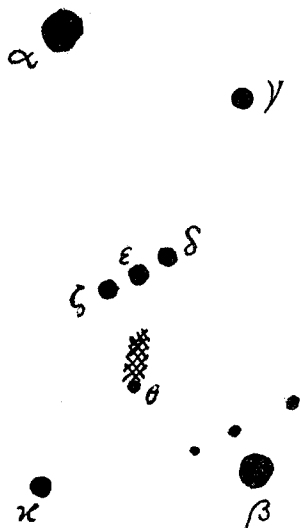
變光型式はセフアイ式である。ボスの P. G. C. 目録によれば此の星の固有運動は毎年  $0''.016$  といふ微量であり、又、光度より視差は  $0''.0043$  (距離 780 光年) と算出されてゐる。

### リチー氏新案の反射鏡

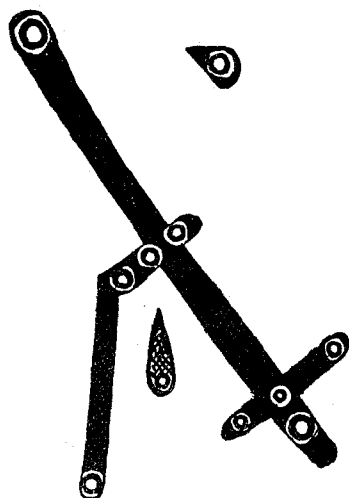
かつて米國 Wilson 山の「60吋」や「100吋」を作つた G. W. Riteley 氏は目下佛國バリに滞在してゐるが、此頃バリのアカデミに報告した所によれば、氏は“aplanatic telescope” と呼ぶ新案の反射望遠鏡を發明し、其の小型のモデルを發表したといふ。此のモデルは長さ「4呎」、直徑「16吋 $\frac{1}{4}$ 」である。若し此の式のものゝ實用される場合には從來のドームの形が非常に小さくてすむだろうと言はれてゐる。

### オリオン星座は「戌」の字

新城新藏博士の説によれば、オリオン星座即ち支那の参宿は舊曆十一月を表はす天象であつて、(「天界」第67號第384頁参照)、十二支の中の戌に當り、星々の列び方が既に「戌」の字の形に出来てゐるのであるといふ。なるほご別圖の通り、第1圖は星座の圖、第2圖は此等の星々をつないで「戌」の字を作つた形である。——此の心持ちで實際のオリオン星座を眺めるといかにもさうなづかれる。



第 1 圖



第 2 圖

### 新しい緯度観測所

最近の消息によれば、ロシア國トルクタンのキタブ (Kitab) といふ所に、新しい緯度観測所が近く設立せられ、從來各國で行はれてゐる緯度の國際的観測事業に参加するといふ。此の土地は北緯 $39^{\circ}8'$ にあつて、中央アジアの舊 Bokhara 國內、Shehr-Sebz といふ都邑の附近である。元の露國の緯度観測所のあつた Tchardjui から東へ約300キロ、又、Tashkent 天文臺より西南へ約300キロである。——歐州大戦争のため一時衰へた此の國際的緯度観測が、此の機に際して又振興するのは喜ばしいことである。因に、目下此の種の観測所としては、我國の岩手縣水澤、イタニヤ國の Carloforte 北米の Ukiah の三ヶ所であるが、近く、北米の Gathersburg も再開され

る筈。

### 「南十字」天文臺 Southern Cross Observatory

一昨年頃、米國フロリダ(Florida)州マヤミ(Miami)市に「南十字」天文臺といふものが創設された。之れは同國アトランタ(Atlanta)市の S. Lynn Rhorer といふ特志家の寄附によつて、Clark 製「五吋」屈折望遠鏡6臺を中心として出来上つたもので、全米國中の天文趣味者を會員としてゐる。マヤミ市はフロリダ半島の南端に近い有名な避寒地であつて、毎年の冬には各地から保養客が雲集する土地であるが、此所は北緯 $25^{\circ}$  であるため Achernar や、Canopus や、Alpha Centauri や、Beta Centauri などの南の星々は勿論、「南十字架」星座の中の最も南端にある Alpha 星さえも地平線に見える。故に上記の名が此の天文臺の名として選ばれたのであつて、毎年一月から三月まで、3ヶ月の間、望遠鏡は同市の新しい Bayfront Park に於いて一般に公開され、15分づつ位の講話も聞かせることになつてゐる。又、此の時季には、市の大公會堂では有名な天文學者を招いて大講演會を催すこととしてゐる。1925 年と1926年にはハーバード大學の Harlow Shapley 教授が招聘されたが、1927 年二月にはヤーキース天文臺の E. B. Frost 教授が招かれて、4500人の聴衆に講演したといふ。

### アメリカ天文學會 (A.A.S.)第38回總會

去る九月6日から8日まで Madison 市の Wisconsin 大學天文台(台長は J. Stebbins 氏)に於いて總會が開かれ、48 人の會員が出席した。會長は次年まで尚ほ Comstock 氏であるが、幹事は永くやつてゐた Stebbins 氏が辭して、新たに(Princeton大學の) R. S. Dugan 氏が就任した。發表された論文は下の如し(著者名のABC順)

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| N. T. Bobrovnikoff, | 彗星のスペクトルに就て         |
| B. Boss,            | 地球自轉の變動に就いて         |
| E.W. Brown,         | 渦巻星雲の引力效果           |
| O. L. Dustheimer,   | ペルセ座中星のスペクトル觀測      |
| P. Fox 及 M. Bennot, | Dearborn 天文台で得た恒星視差 |
| E. B. Frost,        | 故 Barnard の銀河寫眞     |

- H. W. Geromanos, 天文教師のための新しい設備  
 C. M. Hufer, 赤色星の寫眞的調査  
 H. M. Losh, 牛座 $\gamma$ 星の速度曲線と週期  
 D. B. McLanghlin, 蝕連星の質量と光力  
 D. H. Menzel, 木星と土星のスペクトル  
 W. W. Morgan, 日鳥座CP星の分光的及び光度觀測  
 J. J. Nassau 及 P. D. Wilkins, 眼視連星の軌道の圖式決定法  
 E. C. Phillips, 掩蔽觀測の場合の個人差  
 F. E. Ross, 金星の寫眞  
 F. Slocum, 1927年六月29日の日食觀測にノルエーへ遠征旅行報告  
 E. Smith, エロスの比較星の子午環觀測  
 J. Stebbins 及 T. S. Jacobsen, 天王星の光度觀測による太陽變動の試験  
 H. T. Stetson, 太陽寫眞整理のための改正投影法  
 Otto Struve, 1927年度鷲座新星のスペクトル  
 R. E. Wilson, 視線速度に於ける K 項について  
 G. Van Biesbroeck, デラブン彗星(1914 V)の決定的軌道要素  
 同 井ンネケ彗星による彗星屈折の試験  
 山本一清 滿洲奉天で撮影されたる一大井ンネケ流星

因みに、次の第39回總會は去る十二月末、Yale 大學に於いて開かれた筈。

### 人 事 消 息

ラクロワ博士の推舉 フランス國バリ大學礦物學教授 A. Lacroix 氏は、昨1926年汎太平洋會議の時に日本へも來たことがあるが、今回スウェーデン國 Stockholm の Academy of Science の國外會員に推された。

ハクスレイ講演 英國 Birmingham 大學に有名な Huxley 講演に、今1927年十二月1日、ケンブリヂ大學天文臺長 A. S. Eddington 教授が招かれて、講演した。

米國物理學會 來る(1927年)十二月28日より同30日まで Nashville で開かれる此の學會の第29回總會にエール大學理論天文學教授 E. W. Brown 氏は Resonance in the Solar System (太陽系内に於ける共振運動)を題して講演する由。

ノーベル賞 1927年度の Nobel 賞(物理學)は米國シカゴ大學の A. H. Compton 教授(「天界」第67號第413頁を見よ)と、英國ケンブリヂ大學の C. T. R. Wilson 教授(電子に關する實驗研究多し、最近まではケンブリヂ大學天文臺員であつた、「天界」第56號第33頁參照)に授與された。

英國ローヤル學會賞牌 カナダ領 Toronto 大學の J. C. McLennan 教授(「天界」第64號第247頁及び第79號第430頁を見よ)は今般ローヤル賞牌を授與された。

ミリカン教授の名譽 先頃、米國コロラド大學創立五十年祝會の時、カリフォニア工學院の R. A. Millikan 教授(「天界」第67號第430頁及び第76號第304頁を見よ)は LL.D. の學位を贈られた。

アボット氏の講演 去る十月20日より22日まで米國 Schenectady 市 Union 學院で開かれた Optical Society 第 12 回總會に於いて、ワシントン市 Smithsonian Institution 天文臺長 C. G. Abbot 氏は Optics, the Key of Astronomy(光學は天文研究の鍵なり)と題して講演した由。

ハーバード學院天文臺へ寄附 G. R. Agassiz 氏は學術研究費として 25 000ドルを同天文臺に寄附した由。

中野徳郎氏 永く海軍技師として水路部にゐた理學士中野徳郎氏は健康上辭職せられ、尙ほ、學術研究會議員及び測地學委員會委員を辭せられ、専ら靜養せられる由。

オート・ストルーズ氏 1921年以來米國ヤーキース天文臺に於いて分光觀測研究をやつてゐる Otto Struve 博士は、有名な Wilhelm Struve の會孫に當る人であるが、去る七月、同天文臺の助教授に昇任した。

平山臺長退隱の噂 東京諸新聞の報する所に據れば東京天文臺長(本會名譽會員)平山信博士は大學教授の定年制により近日退職せられる由。

ゼリー氏逝く 米國に於いて私立の天體物理觀測所を計營し、研究論文を多く發表した F. W. Very 氏は去る十一月23日逝去した。氏は非常に日本人びいきの人であつた。